

中等條幅手本

史道書

特259
45

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

始



特259
45



中等條幅手本



清
德

清
德

紀元二千六百一年 秋日
宮本 龍太郎 書

克
慎

克
慎

昭和十六年 夏日
谷口 圭三 書

澄懷

懷を澄す

辛巳仲夏日

鳥井恒一書

(二)

清興

清興

昭和十六年八月

中村一夫書

慎則誠

慎めば則ち誠あり

第二學年

山村進書

(三)

恭則壽

恭なれば則ち壽し

第一學年

山本格書

慶雲興る

慶雲興

第三學年

谷村亨

(四)

蘭馨を飛す

蘭馨飛

三年生

石原進

沖眞を保つ

沖眞保

第三學年

北村眞一

(五)

一味眞

一味眞

第三學年

村川眞市

國光旭日

國光
旭日

十五歲

岡村三郎

[六]

臣道實踐

臣道
實踐

十四歲

村川精一

東亞共榮

東亞
共榮

十四歲

水本三郎

[七]

昭和維新

昭和
維新

第一學年

山野徳市

心静興長

心静かに興長し

三年

倉田信次

[八]

思逸神超

思逸神超

二年

川北義次

春和駘蕩

春和駘蕩

一學年

山西正三

[九]

祥風晃朗

祥風晃朗

一學年

三谷光治

舎短取長

第一學年

島田義一

短を捨て長を取る

[〇一]

居盈念損

第二學年

秋田真一

盈に居り損を念ふ

喰経味道

十六歳

有田久遠

經を含み道を味ふ

任叻

[一一]

虞心散慮

十四歳

長井健一

心を虞んじ慮を散す

榮杖尋雲

三年 田村 曲豊

杖を策き雲を尋ぬ 許渾

撥雲尋道

第三學年 森島 敏一

雲を撥ひて道を尋ぬ

映雪讀書

十五歳 大田 貞次

雪に映じて書を読む 孫康

快雪時晴

十五歳 上島 壽

快雪時に晴る

(三一)

(二一)

窮探極覽

十七歲

田村三芳

窮探極覽

[四一]

脱身幽討

十六歲

河本裕

身を脱し幽討す

眠雲卧石

十五歲

人見健二

雲に眠り石に臥す

[五一]

疊雲長風

十五歲 伴川行治

疊雲長風

新歲多清興

十四歲

白鳥友司

新歲清興多し

[六一]

萬國度皇風

第一學年

伊勢國照

萬國皇風度る

衡理貴平心

一年

海原達

衡理は平心を貴ぶ

[七一]

絶慮怡神心

二年

福井逸一

慮を絶ち神心を怡く

太宗

風琴萬壑松

三年生 北川清造

風琴萬壑の松 劉仙倫

[八一]

觀濤海門秋

十七歳 西本 世堂

觀濤海門の秋 岑參

春共聖恩長

十五歳 杉田松治

春は聖恩と共に長し 楊巨源

[九一]

壽命金石固

十四歳 水本壽一

壽命金石固し

翰墨清閑に伴ふ
王珏
四年
多田滿仲

翰墨清閑
伴清閑

翰墨清閑に伴ふ 王珏

讀書至味有り
三年
中山大三

讀書
有至味

讀書至味有り

冬嶺孤松秀づ
順愷之
三年
相良彦一

冬嶺
秀孤松

冬嶺孤松秀づ 順愷之

松柏貞心を見る
三年
齋藤松太郎

松柏
見貞心

松柏貞心を見る

珠汗洽玉體

珠汗玉體に洽し

十六歳

竹中玄治

(二)

清神茗一杯

神を清くす茗一杯 柄霞

三年

中田利一

清如玉壺の氷

清は玉壺の水の如し 鮑照

三年

林松太郎

(三)

讀書懐古今

讀書古今を懐ふ

三年

小野呂遠

夜静寒生書榻

夜静かに寒書榻に生ず 居隆

一年

廣田志明 題

[四二]

風月相和寂寥

風月相和し寂寥たり。劉長卿

二年

古賀四郎 題

謙而和端且恪

謙にして和端且つ恪

二年

森口三郎 題

[五二]

貞廉能守其節

貞廉能く其節を守る

二年

中西貞夫 題

日長 遊院清虛

二年

大内敏夫

日長く庭院清虛

〔六二〕

卜 幽僻避喧塵

四年

辰巳正一

幽僻を卜し喧塵を避く

草振

〔六二〕

和風喜氣相隨

三年

島崎貞一

和風喜氣相隨ふ

〔七二〕

寄興只消毫楮

三年

全田政俊

興を寄せ只毫楮を消す

〔七二〕

德日新萬邦惟懷

一年

全井秀夫

德日に新なれば萬邦惟れ懐く

書經

〔八二〕

陰德自然宜有慶

一年

岩井正夫

陰德自然宜しく慶あるべし

白樂天

與人交外淡中堅

一年

吉本隆三

人と交る外淡に中堅し

〔九二〕

進徳工夫在日新

一年生

本居 篤

徳を進むるの工夫日新に在り

元日都門瑞氣新

元日都門瑞氣新なり

一年 小松武敏

[〇三]

一樓書卷萬花薰

一樓の書卷萬花薰す

二年 田中和藏

風靜書窓月満樓

風靜かに書窓月樓に満つ 袁舉

四年 佐々木隆太郎

[一三]

十月書看雪替燈

十月書を看て雪燈に替る

三年 藤本初太郎

萬壑風聲草木寒

三年

荒木 潔

萬壑風聲草木寒し

黃庚

(二三)

金粟初開曉更清

四年

柴田 善三

金粟初めて開き曉更に清し

萬國移風兆人承慶

三學年

大中 好造

萬國風を移し、兆人慶を承く 丘説

(三三)

瑞日祥雲霽月光風

一學年

山口 俊三

瑞日祥雲、霽月光風

張南軒

人心和平天下淳質

人心和平、天下淳質 忠經

一年

石川三郎

[四三]

處正居中形神以和

正に處り中に居り、形神以て和す

二年

乾 健次

[五三]

松秀寒姿桂榮貞質

松は寒姿を秀で、桂は貞質を榮ふ

三年

林貞太郎

太虚清白空明雪映

太虚清白、空明雪映

二年

木村 巖

貞松擢秀金菊凌霜

四年 近衛國芳

貞松秀を擢きんで、金菊霜を凌ぐ 張協

〔六三〕

流水遠石飛泉挂巖

四年 援三俊三

流水戸を過り飛泉巖に挂る 陸紹衍

秉筆思生臨池志逸

四年 小田極夫

筆を秉れば思生じ、池に臨めば志逸る 趙子昂

〔七三〕

讀千古書友天下士

四年 細川春三

千古の書を読み、天下の士を友とす 陳枚

九重麗天色千門
臨上春

淺川寅三

九重天色麗かに、千門上春に臨む

楊師道

[八三]

花對池中影松搖
風裏聲

松井貞義

花は對す地中の影、松は搖がす風裏の聲

朝廷有直臣天下
必太平

多田清三

朝廷に直臣あれば、天下必ず太平

[九三]

山河非國寶明主
愛忠臣

森田貞一

山河國寶に非ず、明主は忠臣を愛す

張說

讀書坐雲石
鼓琴雜松風

飯田全次

書を讀み雲石に坐し、琴を鼓すれば松風に雜はる

葉順

[〇四]

忙出閑情裏
畫在詩意中

松岡正義

忙は閑情の裏に出で、畫は詩意の中に在り

綠樹村邊合青山
郭外斜

梅本清

綠樹村邊に合し、青山郭外に斜なり

孟浩然

[一四]

緊含時雨潤山雜
夏雲多

人見四郎

野は時雨を含んで潤ひ、山は夏雲を雜へて多し

宗之間

聖澤雲天何以報臣心
鐵石未全衰

梅田宣一

聖澤雲天何を以てか報いん、臣心鐵石未だ全く衰へず 岳珂

〔二四〕

摩天氣直山曾拔徹底
心清水共虛

東輝三

天を摩するの氣は直く山曾て抜き、徹底の心は清く水と共に虚し 元稹

白玉飛泉千仞雪青
松蔽日一林風

十六歲

白峯書

白玉泉を飛す千仞の雪、青松日を蔽ふ一林の風 李白良

〔三四〕

千峯黛色因晴出百
谷泉聲欲暮寒

十六歲

此風書

千峰の黛色晴に因りて出で、百谷の泉聲暮れんと欲して寒し 賀蘭暹

功名多向窮中立禍
患常從巧處生

功名は多く窮中に向つて立ち、禍患は常に巧處より生ず

十六歳

大島幸治

[四四]

喜怒未形中固在發
而中節乃為和

喜怒未だ形れず中に固く在り、發して節に中り乃ち和と爲す

十五歳

本多精二

静定工夫忙裏試和平
氣象怒中看

静定の工夫忙裏に試み、和平の氣象怒中に看る

林希逸

小野長司

[五四]

達人大觀眇萬物烈士
壯心懷四方

達人大觀萬物を眇とし、烈士壯心四方を懷く

陸放翁

中口宗太郎

積一勺以成江河累微塵以崇峻極

松井徳太郎

一勺を積みて以て江河を成し、微塵を累ねて以て峻極を崇す

房薄

[六四]

在家則滋味經籍居官則畢力理治

高木直三

家に在りては則ち經籍を滋味とし、官に居りては則ち力を理治に畢す

杜預

梅花嶺畔三山月宵市樓頭一草堂

有本元藏書

梅花嶺畔三山の月、青市樓頭一草堂

王漁洋

[七四]

萬樹梅花一潭水四時煙雨半山雲

森川翁書

萬樹の梅花一潭水、四時煙雨半山の雲

頌慶

含笑山桃還似後相
親水鳥自忘情

笑を含むの山桃還た識るに似、相親しむ水鳥自から情を忘る 郭律楚材

[八四]

風搖竹影書籤亂花
落池波硯水香

風は竹影を揺して書籤亂れ、花は池波に落ちて硯水香し 王蒙

王蒙

小窓半夜青燈雨幽
樹一庭黃葉秋

小窓半夜青燈の雨、幽樹一庭黃葉の秋 真山民

真山民

[九四]

山入樓中成好句月
來窗下伴殘書

山は樓中に入つて好句を成し、月は窓下に來りて殘書に伴ふ

許棊

月引白雲歸坐榻雨
蒸花氣入窓紗

青山書

風は白雲を引きて坐榻に歸し、雨は花氣を蒸して窓紗に入る 王冕

[〇五]

雪中放馬朝尋紫雲
外聞鴻夜射聲

名口 叢書

雪中馬を放つて朝に跡を尋ね、雲外鴻を聞き夜聲を射る 羅虬

君賢臣忠國之盛也父
慈子孝家之盛也

知

君賢に臣忠なるは國の盛なり、父慈に子孝なるは家の盛なり

[一五]

忠臣不私言不忠履
正奉公臣子之節

道

忠心は私ならず私言は忠ならず、正を履み公に奉ずるは臣子の節なり

好鳥一鳴山花欲咲皓
月千里江流自殷

好鳥一鳴山花笑はんと欲す。皓月千里江流聲有り。

江翠上

〔二五〕

水得閑情心多畫一急川
無俗客樓有賜書

水閑情を得て山畫意多し。門に俗客無く樓に賜書有り。

信 翠上

〔二五〕

我今為國死、不背君親
悠々天地事照鑑在神明

辭世

吉田松陰

我れ今國の爲めに死す。死して君親に背かず。悠々たり天地の事。照鑑神明にあり。

六月日出雄

〔三五〕

道德承天訓塩梅寄真宰
羞無監撫術安能臨四海

述懐

大友皇子

道德天訓を承け。鹽梅眞宰に寄す。羞つらくは監撫の術無きを。安んぞ能く四海に臨まん。

神田文雄書

漢國山河在秦陵草樹深
暮雲千里色無處不傷心

七歲

古川正治

題慈恩寺塔

荆叔

漢國山河在。秦陵草樹深。暮雲千里の色。處として心を傷ましめざるは無し。

[四五]

山館長寂。閑雲朝夕來
空庭復何有。落日照青苔

七歲

山上正三

山館

皇甫冉

山館長へに寂々。閑雲朝夕來る。空庭復何か有る。落日青苔を照す。

[四五]

宴安失機會。耽色豈英雄
堂。源中將應愧小楠公

七歲

青山正治

詠史

廣瀬旭莊

宴安機會を失ふ。色に耽る豈英雄ならんや。堂々たる源中將。應に小楠公に愧づべし。

[五五]

溪邊坐流水。流心共閑
不知山月上。松影落衣斑

七歲

山口孝一

山中示諸生

明王守仁

溪邊流水に坐し。水流れて心と共に閑なり。知らず山月の上るを。松影衣に落ちて斑なり。

[五五]

問春何處來春來在何許
月墮花不之幽禽自相語

望翠華書

問梅閣

明高啓(青邱)

春に問ふ何れの處より來るか。春來りて何れの許にか在ると。月墮ちて花言はず。幽禽自ら相語る。

[六五]

新月細如眉春寒長似帶
幽禽堪夜寒宿在梅花外

鴻筆書

春夜

廣瀬青村

新月細くして眉の如く。春寒長くして帯に似たり。幽禽夜の寒きに堪へ。宿して梅花の外に在り。

一嶽排東海三峰撐北斗
置之齋魯間泰山是培樓

甘山書

富士山圖

廣瀬青村

一嶽東海を排し。三峰北斗を撐ふ。之を齊魯の間に置かば、泰山是培樓。

[七五]

功蓋三分國名成一陣圖
江流石不轉遺恨失吞吳

大草山人書

八陣圖

杜甫

功は蓋ふ三分の國。名は成す八陣の圖。江流れて石轉せず。遺恨吳を吞むを失す。

一室何堪掃九州豈足一步
寄之燕雀徒寧知鳴鶴志

錦 聖年 書

高士吟 賀陽豐年 一室何ぞ掃ふに堪へん。九州豈歩するに足らんや。言を寄す燕雀の徒。寧ぞ知らん鳴鶴の路を。

清淺白石灘結蒲尚堪把
家住水東西洗紗明月下

聖 聖年 書

白石灘 王 維 清淺なり白石灘。綠蒲尚把るに堪へたり。家は住す水の東西。紗を洗ふ明月の下。

斯道在懷三十年向公一日始
談天：行如此公音取雨雪
風雷發自然

法 藤 幸 雄 書

奉^レ和^ニ春嶽老公述懷韻^一 横井小楠 斯の道懷にある三十年。公に向つて一日始めて天を談す。天行此くの如し公看取せよ。雨雪風雷自然に發す。

五尺短身一竹節千山萬水
去無蹤平生心事知何處寄
在芙蓉第一峯

山口 進 書

透^ニ蛟島生東行^一 横井小楠 五尺の短身一竹の節。千山萬水去つて蹤なし。平生の心事知る何れの處ぞ。寄せて在り芙蓉第一の峰。

道德文章叙彝倫精忠大節感
明神如今廊廟棟梁器多是松
門受教人 日高 龜吉

松下村塾

伊藤博文

道德文章彝倫を敘し。精忠大節明神を感ぜしむ。如今廊廟棟梁の器。多くは是れ松門教を受くるの人。

相約投淵無後先豈圖波上再
生緣回頭十有餘年夢空隔幽
明哭墓前 植木公雄書

亡友月照十七回忌作

西郷南洲

相約して淵に投ず後先なし。豈圖らんや波上再生の緣。頭を回らせば十有餘年の夢。空しく幽明を隔てて墓前に哭す。

薩軍振起護龍鱗天拜峰頭
拂浴塵君更快然吾亦快神
州形勢自今新 龍山書

贈薩人木藤市助

高杉晉作

薩軍振起して龍鱗を護る。天拜峰頭浴塵を拂ふ。君更に快然吾亦快なり。神州の形勢自今新なり。

身被狂名何足患只悲父母
老寒庵拔山膽力斬姦劍今
夜客窓夢小楠 芳嵐書

述懷

高杉晉作

身に狂名を被る何んぞ患ふるに足らん。只だ悲しむ父母の寒庵に老ゆるを。山を抜く膽力姦を斬るの劍。今夜客窓に小楠を夢む。

高卧仙了二十春
山中草木是知人
今朝有故辞猿鹤
是知人
釣魚東海濱
而鴻云

逸題

梅田雲濱

高臥悠々二十春。山中草木是れ知人。今朝故あり猿鶴を辭し。釣魚を學ばんと欲す東海の濱。

一本豈能大厦支
此時石道
世情非賊臣
有向青山去
獨向
北方拜帝闕
白山書

失題

梅田雲濱

一本豈能く大厦を支へん。此の時世情の非を道はず。賊臣青山に向つて去る有らば。獨り北方に向つて帝闕を拜せん。

獨騎驛馬入鴻城
遮眼風光依
舊清愧我飄零
城市裏始聞
天上鶴聲
秋華書

到鴻城

高杉曾作

獨り驛馬に騎して鴻城に入る。眼を遮る風光舊に依て清し。愧つ我飄零城市の裏。始めて聞く天上鶴の聲々。

滄海為池山是城
鯨鱉腫報鼉
易溷為請音
昔日鯨魚腹
葬得胡人十萬兵
湖山書

擬送人從軍

賴春水

滄海池となし、山は是れ城。鯨鱉鯨を報ずるも易んぞ驚くを頷ひん。請ふ看よ昔日鯨魚の腹。葬り得たり胡人十萬兵。

秋枕日人愁夜永陰風刺骨
過三更昊天憶應情幽寂一
點星華一照牕明 青風上

獄中作 橋本左内
枕を敷て、四人夜の永きを愁ふ。陰風骨を刺して三更を過ぐ。昊天憶ふに應に幽寂を憐むなるべし。一點の星華を照して明かなり。

二十六年一夢醒る過願思平昔
感滋多天祥大節常新朽木
室れた正氣歌 年山上

獄中作 橋本左内
二十六年夢裡に過ぐ。平昔を願思すれば感滋多し。天祥の大節嘗て心折す。土室猶吟ず正氣の歌。

胡雲漢、畫冥濛天下無人護
聖躬九關他年遭吉夢金剛
山在野山中 山石書

野山獄中作 久坂玄瑞
胡雲漢々として畫冥濛。天下人の聖躬を護る無し。九關他年吉夢に遭はん。金剛山は野山の中に在り。

路到長崎意豪青山絶處
是鯨濤慨然放眼接孤劍壓海
變船百尺高 戀風書

到三瓊浦途上 久坂玄瑞
路は長崎に到つて意氣豪なり。青山絶ゆる處是れ鯨濤。慨然眼を放つて孤劍を撫つ。海を壓するの變船百尺高し。

福西賢一
寶 是 間

寶 是 間

[八六]

中本大三郎
雲 如 福

し 如 の 雲 福

第一學年
中本博太
壽 山 南

壽 の 山 南

[九六]

第一學年
里村武治
虛 清 守

る 守 を 虛 清

辛巳夏日
四川春浩
圖

襟情淡性

練情淡性

[一七]

丙和十二年六月
近江法朗
圖

泊淡霞烟

泊淡霞烟

乙丑題
圖

素清身脩

素清身脩

[一七]

乙丑題
圖

話清思簡

話清思簡

雲開萬壑春

士禮書

雲は開く萬壑の春

〔二七〕

南山同聖壽

正長書

南山聖壽を同じくす

虚心何慮同心少敬事
弥知處事難

正長夏日 正長書

心を慮しうすれば何ぞ慮らん心と同じく少なく、事を敬すれば彌よ知る事を處する難し

君繼善

〔三七〕

神仙窟宅垂楊裏
畫溪山落照中

正長書

神仙の窟宅垂楊の裏、圖畫の溪山落照の中

葉茵

樹密茅檐古荒烟野水濱
遙看濟川者應是此中人

偶成

熊澤蕃山

樹密にして茅檐古し。荒烟野水の濱。遙かに看る川を濟る者。應に是れ此の中の人たるべし。

[四七]

灼々園中花
蚤蕪還先
若女
遲々湖畔
松樹鬱々
人言晚翠

江坪上

大器晚成

觀貞

灼々たる園中の花。蚤く發いて還つて先づ萎む。遅々たる湖畔の松。蔚々として晚翠を含む。

路入羊腸滑石苔
風從鞋底
掃雲迴登山
恰似書生業
一出高光景開

山行示同志

草場佩川

路は羊腸に入つて石苔滑かに。風は鞋底より雲を掃ふて廻る。登山恰も似たり書生の業。一步步高く光景開く。

[五七]

峻增萬嶽
清乎秋
赫灼朝暉
照八洲
區々休
說風物
美地
聖人傑
是神州

富士山

乃木希典

峻増萬嶽千秋に聲ゆ。赫灼朝暉八洲を照らす。區々として説くを休めよ風物の美を。地靈人傑是れ神州。

一忍七情皆中和再忍五福
皆駢臻忍到百忍滿腔春熙
宇宙都真境

忍

中江藤樹

一忍すれば七情皆中和し。再忍すれば五福皆駢び臻る。忍びて百忍に到れば滿腔の春。熙々たる宇宙都べて真境。

[六七]

百戰無功半歲刑首邱幸
道家山吹僕向死如仙家盡日
洞中棋響

題岩崎谷洞

西郷南洲

百戰功無し半歲の間。首邱幸に家山に返る事を得たり。笑ふ僕れ死に向はんとして仙客の如し。盡日洞中棋響閑なり。

昔聞洞庭水今上岳陽樓吳楚東南拆乾
坤日夜浮親朋無一字老病有孤舟戎馬
關山北憑軒涕泗流

杜甫登岳陽樓詩

史忠書

登岳陽樓

杜甫

昔聞洞庭の水。今上る岳陽樓。吳楚東南に拆け。坤乾日夜浮ぶ。親朋一字無く。老病孤舟有り。戎馬關山の北。軒に憑つて涕泗流る。

[七七]

客路青山二水合綠水前潮平兩岸潤風
正一帆懸海日生殘夜江春入舊年鄉
書何處遠歸鴈洛陽邊

王灣北固山下詩

史忠書

客路青山の下。行舟綠水の前。湖平かにして兩岸潤く。風正しうして一帆懸る。海日殘夜に生じ。江春舊年に入る。郷書何の處にか達せん。歸雁洛陽の邊。

次北固山下

王灣

曾識帶經耕且鋤新田
逃跡惜三餘秋霜
春雨時月下花陰
或侍輿幾處雲巖
尋傑士連年華洛
拜皇居相逢杯酒
宜論志大夫
何必讀書 史道書

曾て識る經を帶んで耕し且つ鋤くを、新田に跡を逃れて三餘を惜しむ。秋霜春雨時に樹を攀ち、月下花陰或は輿に侍す。幾處か雲巖傑士を尋ね。連年華洛皇居を拜す。相違うて杯酒宜しく志を論ずべし。大丈夫何ぞ必ずしも書を讀まむ。贈高山彦九郎。頼春水

飛雨蕭々孤雁鳴く。壯心凛々又驚くに堪へたり。忽ち聞く城裡一聲の笛。既に見る門前數千の兵。地に投じ天に投じ左右開く。前を衝き後を衝き縦横に破る。氷刀三尺清風を拭ふ。千里雲晴れて月は五更。史道書

飛雨蕭々孤雁鳴く。壯心凛々又驚くに堪へたり。忽ち聞く城裡一聲の笛。既に見る門前數千の兵。地に投じ天に投じ左右開く。前を衝き後を衝き縦横に破る。氷刀三尺清風を拭ふ。千里雲晴れて月は五更。失題 橋本左内

昭和十六年八月

史道書



◆ 奈良師範學校教授 辻本九華先生書	楷書 軌範 (筆法解說)	定價金六十五錢 送料金九錢	手本型 長帖
行書 軌範 (筆法解說)	定價金六十五錢 送料金九錢	手本型 長帖	
草書 軌範 (筆法解說)	定價金六十五錢 送料金九錢	手本型 長帖	
◆ 奈良師範學校教授 辻本九華先生書	三體蘭亭帖 (楷書篇)	定價金十二錢 送料金二錢	半紙判 和裝
	三體蘭亭帖 (行書篇)	定價金十二錢 送料金二錢	半紙判 和裝
	三體蘭亭帖 (草書篇)	定價金十二錢 送料金二錢	半紙判 和裝
	三體手紙用語手本	定價金十二錢 送料金二錢	半紙判 和裝
◆ 東方書道會審議員 高塚竹堂先生書	國民習字教範 (かな篇)	定價金十二錢 送料金二錢	半紙判 和裝
◆ 東京書道會理事 門窪與三郎先生書	女子書	定價金一圓八十錢 送料金十五錢	書函紙二つ折横長
◆ 彰樂書道會長 辻本史邑先生鑑輯	昭和選碑法帖大觀	定價各冊一圓三十錢 送料金九錢	第一輯十二卷第二輯十二卷 第三輯十二卷全三十六冊
◆ 昭和新選碑法帖大系	昭和法帖大系	定價各冊三圓五十錢 送料金十四錢	楷書篇三冊行書篇五冊 草書篇一冊草書篇六冊全十五冊

發行所 大阪府大阪市東區清水町 大替振一〇三番 駿々堂書店

◆文學博士尾上柴舟先生書
かすか帖

定價金一圓五十錢
送料金九十錢
手本型長帖
コロタイプ版

◆日下部鳴鶴先生書

鳴鶴翁楷書帖

定價金五十錢
送料金九十錢
美濃大判和綴

鳴鶴翁行書帖

定價金五十錢
送料金九十錢
美濃大判和綴

鳴鶴翁草書帖

定價金五十錢
送料金九十錢
美濃大判和綴

鳴鶴翁三體帖

定價金一圓五十錢
送料金十五錢
右三冊 鉄入

鳴鶴翁臨蘭亭手本

定價金十二錢
送料金十二錢
美濃大判和綴

鳴鶴翁楷書手本

定價金十二錢
送料金十二錢
美濃大判和綴

鳴鶴翁隸書手本

定價金十二錢
送料金十二錢
美濃大判和綴

◆東方書道會監查員松本芳翠先生書

楷書指針(初等篇)

定價金七十錢
送料金七十錢
手本型長帖

楷書指針(應用篇)

定價金七十錢
送料金七十錢
手本型長帖

楷書指針(隨書篇)

定價金七十錢
送料金九十錢
手本型長帖

發行所 大阪南區東清水町二十九番地 大替振一〇番 東區清水町 大阪南區東清水町二十九番地 駿々堂書店



—(有所權版)—

昭和十六年十一月十日印刷
昭和十六年十一月十五日發行

中等條幅手本

定價壹圓八拾錢
送料十四錢

華樂書道會長

辻本史邑

書者 大坂市南區東清水町二十九番地 大淵善吉

發行者 大坂市東區和泉町卅一番地 平版印刷株式會社

印刷者 大坂市南區東清水町二十九番地 駿々堂書店

發行所 支店 東京市神田區神保町三丁目 日本出版文化協會 會員番號一〇二一六三番 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

配給元

終

